

古辞書ことはじめ16

## 『塵袋』(ちりぶくろ)

『塵袋』は、文永・弘安年間頃(一二六四〜八七)の作成になる十一卷二十四部から成る類別型(現在の百科辞典に相当)とする生活万般の知識内容を網羅した辞書です。現存する最古の資料は、高野山無量院で印刷上人自筆の永正五年(一五〇八)十一月四日に書写を開始して、同年十二月七日に書写を終えた印刷七十四歳の時の文献が最も古いもので、この書籍は高野山から江戸時代の末に流出して薩摩藩士山田清安の手に移り、これを天保十五年に神谷三園が書写して以来世に弘まったものです。その一本が名古屋1-1の刈谷にて転写されています。この奥書に「文化七年庚午九月令修補之為令法久住学衆不退、院務乗海誌」と見えています。その後印刷自筆本は江戸にもたらされ、どのような経緯を辿ったかは定かではありませんが森銚三曰く、町田久成氏によって帝室博物館に納められ、現在の上野国立博物館が国の重要文化財として今日も所蔵しています。

この辞書の編纂方針は、鎌倉時代の橘忠謙編『伊呂波字類抄』に倣って、

- 一卷 天象・神祇・諸国・内裏
- 二卷 地儀・殖物(土地と栽培される植物)
- 三卷 草・鳥(薬用植物と鳥類)
- 四卷 獣・虫(獣類と虫・魚その他)

- 五卷 人倫(官職・職種・家族その他)
- 六卷 人体・人事(身体各部位・人の所行)
- 七卷 佛事・寶貨・衣服・管弦
- 八卷 雑物(武器・生活道具・書状その他)
- 九卷 飲食・員数・本説・禁忌
- 十卷 詞字(種々の専門用語)
- 十一卷 疊字(特に留意すべき熟語類)

に分類編成されており、項目数は六二〇項目に及んでいます。この編者が誰なのかは定ではありません。鎌倉時代の貴族として、武士階級の人たちが日常生活を送っていく上で、知っておきたい事柄を集めて書記資料や公的行事などで即座に読むことで役に立つ内容をこのなかに集大成した当時の「知恵の蔵」というにふさわしい辞書と言えます。この題名も世の塵を集めるようににして、それらを袋に詰め込んだという意味でしょうか、題して『塵袋』という名がここに付けられています。

### 繙く辞書から読むための辞書へ

この『塵袋』という辞書が、先行する経尊編『名語記』全六卷ということばの由来(語源辞書)について記載する辞書と同様に、鎌倉時代の日常語について収録し、日常茶飯事の生活語彙を採録していることもあって、単にことば(漢字標記語)を繙くだけではなく、まさに読むための辞典へと内容を転換した一般向けの教養書となっています。

この背景には、貴族社会から武家社会への文化面での移動が実際に動きだしたことが大きな言動力となつています。貴族社会では、律令制に基づく大學という学問の伝統が保持され、学院や書房をもつて子弟の教育に寄与してきました。そこでは、源爲憲編『口遊』（天禄元年（九七〇））や「往来物」と呼ばれる教科書類『明衡往来』などが編纂され、専門の教授者もおりました。これに対し、鎌倉幕府の上層武士は、この貴族が保持してきた学問を修得することに努める以上に、軍備統率の兵力である弓馬の道を極めていました。幕府では『吾妻鏡』に代表する記録文書、『御成敗式目』といった法制度書の充実にも及んだのですが、これらは京都から下った貴族文人の専門事務処理方の手に委ねられておりました。一五〇年の間、武士を教育する学校教育制度を設けていないことがこのことを如実に示しています。その後、幕府も安定期を迎えるに従い、武士たれど作文修得学習は避けられなくなっていくます。この武士の教育に地方寺院の僧侶が大いに参画してきます。僧侶は僧侶で宗教活動に武士の後ろ盾を必要としましたので、渡りに舟であったのです。武士は一族郎党の居住地に置かれた氏寺を中心一族の知識・学問の基盤を整えていくことになったのです。その流れの一つとして、『名語記』や『塵袋』が学識豊かな僧侶によって編まれていったことは言うまでもないことでしよう。私は、本学大学生であった猪瀬亜希子さんと共同で、『塵袋』における典拠漢籍『文選』『文選注』について」（駒澤短期大学紀要第三十号、平成十四年の論文）を纏めていますが、このとき、貴族が用いた『文選』資料である九條家本『文選』の語彙とは合致せず、むしろ、中国宋版『文選』を基調とした和刻本「六臣註文選」からの引用と符合することを突きとめこれを検証しております。

さらに、南北朝の動乱を経て、日本の社会生活構造は大きく揺り動かされてきました。武家中心の政治体制が京都に進出したことで、文化面でも大きなうねりを見せています。この『塵袋』から一五〇年後に編纂された『搯囊鈔』十五巻と比較してみると、その文化的差異がこれも如実に見えてきます。

因みに、本学で私が二〇〇一年度国語学演習の学生と共同で整理した『塵袋』と『搯囊鈔』語彙比較表がありますのでご参照願います。

### 鎌倉時代の「知恵の蔵」なる『塵袋』

この冒頭でも述べたように、編者は学識教養の高い眞言系の僧侶であることは疑いなしとして、どのような出自の人物であったかは、皆無に等しいのが現行研究段階です。この『塵袋』が印融上人によって書写された高野山には、西南院所蔵本と金剛院所蔵の別な二種類の『塵袋』が現存しております。前者西南院所蔵本は、巻四・七・八の三巻が欠本とするもので、奥書に「大永七年丁亥四月十六日書了 大乘院順任長真房 十一帖内」とある別筆書写です。また、後者は、板状化が進みこれを開くことすら難しい状況にあるもので、十一巻末尾の奥書を見ることが出来ないこれも古写本です。

これらの諸本の他に印融上人が書写したものを転写した資料が名古屋の刈谷市立図書館に所蔵されています。今、印融書寫本は、二度影印複製され、その最初に収めたのが日本古典全集（上下二冊）に入っています。さらに、山崎誠編『印融自筆本重要文化財塵袋とその研究』の影印編と翻刻・索引編があります。また近年、東洋文庫（平凡社）

から木村紀子編『塵袋』（上下）の翻刻及び注釈資料が刊行されています。

これらの先行資料をもとに、少しくその内容について見ていくことにします。  
「事例その1」

巻一の第三十七「鬼門」を見ると、「〇〇ト云フハ〇〇也。：云ヒナラハセルハ如何」のように問いかけがあつて、これに応答する形式でその意味や語源を多くの古典資料を引用して説明しています。

一鬼門ト云フハ世寅ノ方也古人ノ物語ニモバケモノ  
ナトノ来ル事シラフニハイヌ井ノ方ヨリシラクサキ  
風フキテ来トノミ云ヒナラハセルハ如何  
六字ノ驗記ト云フモノニハ天獄者辰巳間一切天魔  
自此往還ス地獄者戌亥間一切鬼自此往還  
スニ十キニアラサル欵

《翻刻》

「問」鬼門ト云フハ丑寅ノ方也。古キ人ノ物語ニモバケモノナトノ来ル事ヲ云フニハイヌ井ノ方ヨリシハラク。サキ風フキテ来トノミ云ヒナラハセルハ如何。

「答」六字ノ驗記ト云フモノニハ天獄ノ者辰巳間ニ一切ノ天魔自レ此レ往還ス。地獄者戌亥ノ間一切ノ鬼自レ此レ往還ス云々。ユヘナキニアラサル欵。

「事例その2」巻三、草鳥・植物

八二 盧橘ヲハ花橘トノミ心得ヘキ歟。又枇杷ト云フ説アリ。真偽如何。

古来ノ難義ナリ。イカテカ。タヤスク定ムヘキ。〔引ニ為長卿上林賦盧橘夏熟。楊雄甘泉賦玉樹青葱ト云ヘルヲ。此ニハ共ニ虚誕云々。上林ニ無盧橘。甘泉無玉樹云々〕三州入道家照入宋ノトキ宋人ニアヒテ云ケルハ。上林賦ニ盧橘ハ夏熟ト云フ。文ヲ我國ノ先賢ツタヘテ花橘トス。入宋ノ後チ土風ヲ見レハ。震旦ノ人ミナ枇杷ヲ盧橘トス。本朝ノ説ハアヤマレリト。シリヌト云ケルヲ。宋人周良史キ、テ。此ノ朝ニ来テカタリ。ケリテ云コトアリ。嚴長史詩云。冬ノ花ニハ摘ニ盧橘ヲ。夏ノ菓ニハ嘗ニ楊梅ヲト云ヘリ。コノ心ニハマコトニ。枇杷ナリ。ハナタチハナハ。冬ハナサクコトナシ。夏ハナサク。郭公同時ノ景物コトフリニタリ。博聞後録ト云フ物ニハ枇杷ノ異名ハ盧橘。タチハナノ異名ハ木奴ト云ヘリ。コレラハ異儀ナリ。枇杷ヲ云フトキコユ。但シ上林賦ヲミレハ。盧橘ト枇杷トナラヘテ。二ツナカラ。ツラネヲク。コレヲ思ヘハ各別歟トモオホユ。サレハニヤ。江帥ハ盧橘ハ花橘ナリト云ヘリ。盧ノ字ヲハクロシトヨメリ。イツカハ橘色ノクロキ事アル。道理ニカナハス枇杷モ黄ナルイロノ分ナレトモ。二トトレハ橘ヨリハクロケレハ。クロタチハナトモ云ヘクヤ。字ハカヨハシ

テ用フル事ソノ例コレオ、シ。本コノ中ニハシカシ。ナカノカタハラノ字ヲカリテヨメリ。コレヲ以テ思ニハハナタチハナヲ**盧橘**ト云フヘキヲ盧トカケル歟。花櫨ハカハ、ヒロクナリ。ミハチキサクナリテ。ス、ノ子ノヤウナレハ。イホリノ中ニアルシノ住シタルニ。タルユヘニ盧ノ櫨トハ云歟トオホユルナリ。但シ荒涼ノ邪推ナリ。人ノモチフヘキニアラス。枇杷ト云フ二字ハ。コノ木ノ葉琵琶ニニタレハ。玉ノツクリヲステ、木篇ヲシタカヘテ名トス。琵琶ハ拜「奉」ヲレ手曰レ琵琶ト。引手ヲ曰レ琵琶ト云ヘリ。又推手ヲ曰レ琵琶ト。引手ヲ曰レ琵琶トモ見エタリ。心ハ同事歟。「卷2植物一二六」一二九頁、69〜70」

《**典拠**》もんぜん【文選・上林賦】。

《**語釈**》ろきつ【**盧橘**】然相如賦<sup>三</sup>上林<sup>二</sup>、而引<sup>三</sup>盧橘夏熟<sup>二</sup>、楊雄賦<sup>三</sup>甘泉<sup>二</sup>、而陳<sup>三</sup>玉樹青葱<sup>二</sup>、班固賦<sup>三</sup>西都<sup>二</sup>、而嘆以<sup>レ</sup>出<sup>三</sup>比目<sup>二</sup>、張衡賦<sup>三</sup>西京<sup>二</sup>、而述以<sup>レ</sup>遊<sup>三</sup>海若<sup>二</sup>、假<sup>三</sup>稱珍怪<sup>二</sup>、以爲<sup>三</sup>潤色<sup>二</sup>。「然れども相如は上林を賦して、**盧橘**夏に熟するを引き、楊雄は甘泉を賦して、玉樹の青葱たるを陳べ、班固は西都を賦して、嘆ずるに比目を出すを以てし、張衡は西京を賦して、述ぶるに海若に遊ぶを以てし、珍怪を假稱して、以て潤色を爲す」《**文選**・第四卷①234・008・04・12b》\*然<sup>モ</sup>相如<sup>ハ</sup>賦<sup>ニ</sup>上<sup>一</sup>林<sup>ヲ</sup>而引<sup>ク</sup>盧橘夏<sup>ツ</sup>熟<sup>コトヲ</sup>。楊雄<sup>ハ</sup>賦<sup>ク</sup>甘<sup>ク</sup>泉<sup>ヲ</sup>而陳<sup>ス</sup>玉樹青<sup>ク</sup>葱<sup>ナリト</sup>云<sup>フ</sup>。班固<sup>ハ</sup>賦<sup>ク</sup>西<sup>京</sup>都<sup>ヲ</sup>而難<sup>スルニ</sup>以<sup>シテ</sup>出<sup>ス</sup>比<sup>目</sup>。目<sup>ヲ</sup>。張衡<sup>ハ</sup>賦<sup>ク</sup>西<sup>京</sup>而述<sup>ス</sup>以<sup>スレバ</sup>遊<sup>ブ</sup>云<sup>フ</sup>海<sup>ノ</sup>若<sup>ニ</sup>。若<sup>ニ</sup>。「割注」劉曰。凡<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>四者皆非<sup>ニ</sup>西京之所<sup>レ</sup>有也」《和刻本文選4・19》\*《和刻本文選・8・11(15)08・07a》

《**読み下し文**》

**盧橘**をば**花櫨**とのみ心得べきか。又**枇杷**と云ふ説あり。真偽、如何。

古来の難義なり。いかでか、たやすく定むべき。『**為長卿**、**上林賦**に「**盧橘**夏熟」。『**楊雄**』**甘泉賦**に「**玉樹青葱**」と云へるを引く。此の二は、共に虚誕云々。上林に「**盧橘**」無し。甘泉に「**玉樹**」無

し云々」三州入道家**照**、入宋のとき宋人にあひて云ひけるは、**上林賦**に「**盧橘**」は「夏熟」と云ふ。文を我國の先賢つたへて「**花櫨**」とす。入宋の後ち、土風を見れば、震旦の人みな「**枇杷**」を「**盧橘**」とす。本朝の説はあやまれりと。しりぬと云ひけるを、宋人**周良史**きゝて、此の朝に来てかたりけりて云ふことあり。『**嚴長史詩**』に云く、冬の花には「**盧橘**」を摘み、夏の菓には「**楊梅**」を嘗むと云へり。この心には、まことに「**枇杷**」なり。「はなたちばな」は、冬はなさくことなし。夏はなさく。「郭公」同時の景物ことふりにたり。『**博聞後録**』と云ふ物には、「**枇杷**」の**異名**は「**盧橘**」。「たちばな」の**異名**は、「木奴」と云へり。これらは異儀なり。「**枇杷**」を云ふときこゆ。但し、**上林賦**をみれば、「**盧橘**」と「**枇杷**」とならべて、二つながら、つらねをく。これを思へば各、別かとおぼゆ。さればにや。「**江帥**」は、「**盧橘**」は、「**花櫨**」なりと云へり。「**盧**」の字をば、「くろし」とよめり。いつかは、「**櫨**」色のくろき事ある。道理にかなはず。「**枇杷**」も黄なるいろの分なれども。二ととれば、「**櫨**」よりは、「くろし」ければ、「くろし」も云ふべくや。字は、かよはして用ふる事その例、これおとし。本この中にはしかじ。なかのかたはらの字をかりてよめり。これを以て思ふには、「はなたちばな」を「**盧橘**」と云ふべきを「**盧**」とかけるか。「**花櫨**」は、**か**はひろくなり。みは、ちみさくなりて、**すゞの子**のやうなれば、いほりの中にあるじの住したるに、「たるゆへに」、「**盧の櫨**」とは云ふかとおぼゆるなり。但し、荒涼の邪推なり。人のもちふべきにあらず。「**枇杷**」と云ふ二字は、この木の葉、「**琵琶**」ににたれば、玉のつくりをすてゝ。木篇をしたがへて名とす。「**琵琶**」は、手に押「**奉**」を琵琶と曰ふ。手を引くを「**琵琶**」と曰ふと云へり。又「**推手**」を「**琵琶**」と曰ふと。「**引手**」を「**琵琶**」とも曰ふと見えたり。心は、同じ事か。

以上示したところをもって、その具体的な記述内容については理会ができたでありま

しよう。次に、この辞書から実際に学ぶべきところを考察しておきましょう。

「事例その3」「沙糖」と「沙棠」「卷九、飲食」  
四三五 沙糖ト沙棠トハ一物歟。各別歟。

各別也。沙糖ハ唐ノアメ也。甘蔗ト云フ草ハタカクオヒアカリテ、クキハマキモノ、如シ。アマキ草也。象コレヲコノミクラフ。人モコノ草ノクキヲワキリニキリテ、スハフレハアマキ、シルアリ。コレヲ煎シテ、ツ、ハカシタルヲ沙糖ト云フ。沙棠ハ仙菓ノ名也。ツネニアルモノニ非ス。山海經ニ曰、崑崙ノ丘ニ有レ木ニ焉。其ノ状チ如クシテ、棠ノ而黄<sup>キナル</sup>花赤<sup>ハナアカキ</sup>實<sup>ミ</sup>アリ。其ノ味ヒ如クシテ、李<sup>スモ、</sup>ノ而無<sup>サラ</sup>シ核<sup>サネ</sup>。名テ曰ニ沙棠ト。御スル「六オ」用也。水ヲ補入・泳<sup>ヲヨク</sup>人食ラヘハ使シムレ不<sup>サラ</sup>レ溺<sup>ヲホレ</sup>ト云ヘリ。呂氏春秋曰、果之美者沙棠之實ト云ヘリ。「六一六〜六一七頁、312〜313」

《課題1》右に示した、同音語「沙糖」と「沙棠」の疑問、「一物」すなわち同じ品物かそれとも全く異なる品物なのかというものです。この回答を出来る限り理會できるように図を交えながら現代文にして説明して見ましょう。

《課題2》解説でも紹介しましたが、同時代の『名語記』を調べて見ましょう。

《課題3》『塵袋』と百五十年後の『塩囊鈔』そして『塵添塩囊鈔』と共通する項目を比較して、その時代と文化の違いを指摘してみましよう。

〔参考文献〕

正宗敦夫編纂校定『塵袋』（上下二冊）昭和十年一月、日本古典全集刊行會刊。山崎 誠編『<sup>印刷自筆本</sup>重要文化財 塵袋とその研究』（上下二冊）平成十年二月、勉誠社刊。吉田幸一「塵袋引用書名索引(一)」書誌学12-1  
〔昭和十四年(1939)・01〕。吉田 幸一「塵袋引用書名索引(2)」書誌学12-3〔昭和十四年(1939)・03〕。吉田幸一「塵袋に就いて」学苑〔昭和十四年(1939)・12〕。木村紀子「塵袋の中世―言語意識をめぐって―」国語国文50-8〔昭和五十六年(1981)・08〕。山崎 誠「塵袋引書攷」国文学研究資料館紀要第24号〔平成十年(1998)・03〕。西崎 享編『日本古辞書を学ぶ人のために』（世界思想社1995年刊）。和刻本『文選』第一卷〜三卷（全三卷）長澤規矩也編・昭和五十年二月汲古書院刊。斯波六郎編『文選索引』一〜三、付録一（全四冊）昭和三十二年三月・京都大学人文科学研究所索引編集委員會刊行。富永一登、小尾郊一『文選李善注引書索引』（研文出版一九九六年二月刊）。  
森銑三『書物と人物』（熊谷書房刊、1943.01）に、「塵袋を中心として」。